

旧水口図書館保存修理工事について

主席研究員 平田文孝／研究員 鴨 昌和・野々部万美恵

概 況

水口町は滋賀県最南部の甲賀郡7町のひとつで、本事業完了後の平成16年（2004）10月に甲賀郡の5町（水口町、甲賀町、甲西町、土山町、石部町）が合併し市制が敷かれた。甲賀市域の南方が三重県に接する地理的条件から、水口町は古くから伊勢神宮参宮の街道筋にあたり、中世に入り大岡山に築城されるが関ヶ原合戦で落城した。その後、慶長期には東海道の宿駅に指定され経済的な発展を遂げ、寛永期には将軍家御茶屋御殿として水口城が築かれ、城下町としての賑わいがみられるようになり、以降甲賀地域の中心的存在として位置付けられてきた。

今回報告する旧図書館は、水口城外濠にあたる水口小学校の校門脇に建っている。水口小学校における図書館の歴史は、水口尋常小学校時代の明治42年（1909）に始まる。卒業生が図書館の必要性を提案したのが動機となり、町内や巖谷小波¹⁾をはじめとする有縁の人々の寄贈図書、委託図書によって開館した。小学校校門の東に3坪の独立書庫、西の校舎の一部を県下初の開架式閲覧室に改造したもので、小学校附設の町立図書館として社会と学校教育の両面に貢献する機能を有していた。またこの図書館には子守文庫も併設されており、子守に雇われた未就学児童をはじめ様々な人達が教養を高める場所となるように腐心したことが窺える。その後、全国的に学校が独立の図書室を設けるようになり、水口小学校においても例外ではなかった。同時期に水口町出身の実業家井上好三郎氏から図書館改築の寄付を受けることになり、同じ小学校の一角に学校図書館としてではなく地域の町立図書館として建設するに至った。そして昭和3年（1928）、建設費用11,000円をかけて完成したのが、現在の旧図書館の建物である。

設計は、当時近江八幡を中心に活躍をしていたヴォーリス建築事務所²⁾で



写真-1 着工前の旧図書館正面

あった。ヴォーリスの設計した旧図書館は、当時の水口町では相当に斬新な建物であったと伝えられ、それだけに地域の多くの人々がこのモダンでハイカラな建物の誇りや愛着を感じてきたようである。図書館は、当初1階が児童を対象とした閲覧室、2階は一般者向けの閲覧室兼会議室としており、屋上にはベンチが置かれて憩いの場になっていた。

しかし年々蔵書が増加し手狭になり、昭和45年（1970）図書館を別の場所に新たに設け、以後、旧図書館は水口教科書センターと改称され、過去の教科書保管収集閲覧や校舎に使われていた古い瓦等の資料保管の場所として利用されてきた。これまでのように毎日人が訪れることもなく放置に近い状態になった建物は、昭和50年（1975）頃、塔屋の上部を飾っていたランタンが維持できなくなり解体撤去した。同時期、雨漏りが酷くなった屋上防水や外装の塗り壁の補修工事を行ったが、部分的な修理で済む状況ではなくなっており全体的な老朽化が加速していった。

注1 いかわ さぎなみ 水口藩出身の官僚で書家の巖谷一六の三男として東京で生まれる。小説家としてデビュー後、日本における児童文学の創始者として活躍した。主な作品には「こがね丸」のほか、「日本昔噺」や「世界お伽噺」などでは伝承されてきた物語に手を加え子供が親しみやすいものに工夫した。現代においても、一般に子供時代に馴染み親しむ桃太郎などの昔話のほとんどは巖谷小波の再話が元になっているとされる。水口小学校には明治41年（1908）に御伽噺講演会のため来校し、その2年後に校歌の作詞をするなど浅からぬ縁があり、また水口町にとっては親しみ深い郷土の誇りといえる。

注2 ヴォーリス建築事務所 ウィリアム・メレル・ヴォーリス（1880～1964）が開設した設計事務所。ヴォーリスは、明治38年（1905）アメリカから滋賀県商業学校（現八幡商業高校）の英語教師として来日した。その後も亡くなるまで近江八幡に留まり、建築設計（ヴォーリス建築事務所）や医薬品販売（近江兄弟社）を経済活動の中心としながら、キリスト教伝道活動のほか教育（後の近江兄弟社学園）や社会事業など幅広く活躍した。戦中に帰化し一柳米来留ひとつやなぎめいれと名乗り、のちに近江八幡名誉市民第一号となった。旧図書館を設計した昭和初期は、戦前期ヴォーリス建築の最盛期にあたり珠玉の作品のひとつと高く評価されている。水口には彼の作品として水口協会もある。

事業の経緯

近年、ヴォーリス建築全般が社会的に注目されるようになり、水口町においても老朽化が著しくなっていた旧図書館の保存を望む声が高まりつつあった。そうした住民の意識の変化を汲み取った水口町は、「水口町総合計画」のひとつとして旧図書館の保存をとりあげ、在り方や活路について検討をはじめた。そのなかで、旧図書館の歴史的建造物としての重要性を明らかにし保存活用していく方針となり、平成13年（2001）国登録有形文化財に登録され、また同年に保存修復を目的とした学術調査が行なわれた。調査は当財団が受託し、京都大学工学部建築学科西澤研究室が行なった。傷んだ部分の修理のほかに、写真から当初の存在が明らかであるランタンの復原や耐震性を確保するための構造補強を提案している。

平成14年（2002）には水口町教育委員会の呼びかけに応じるかたちで、「旧水口図書館を活かす研究会」が発足し、建物の保存修理を前提とした活用についての意見交換がなされ、提言書として纏められた。前後して教育委員会では修理のための準備を進め、平成15年（2003）7月当財団に実施設計が委託された。実施設計は平成15年7月から開始し、完成した後直ちに一括請負工事の指名競争入札を行なった。結果、地元の株式会社フジサワ建設が落札し、平成15年9月から工事を着手し、翌年3月末に完了した。なお、事業の財源として滋賀県市町村振興総合補助金の交付を受けた。

旧水口図書館の概要

構造形式

鉄筋コンクリート造（壁レンガ造） 2階建て 一部塔屋付き 陸屋根

規 模

面積 建築面積52.2㎡ 延面積109.5㎡

高さ 道路側敷地立ち上がりから2階屋上パラペット上端までの高さ約8.3m

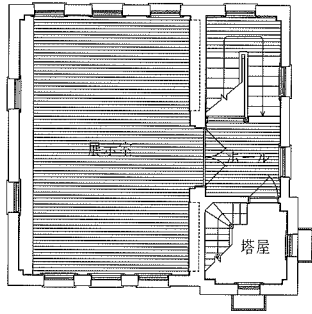
同所から塔屋パラペット上端までの高さ約10.2m

平 面

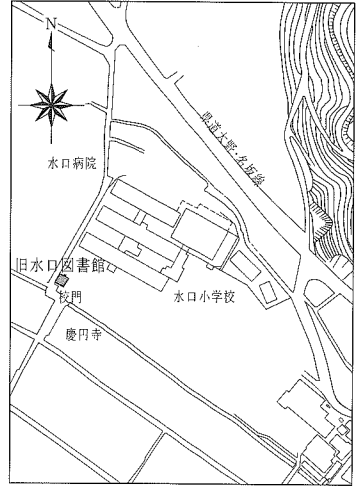
東を約39度南に振った方角を正面とし、平面は約7.15m角で、東北角側通りをL型に柱半分外に広げ塔屋部分を印象づけている。この部分東面に玄関があり、沓脱ぎから1段上は2.5畳大のホールで、右手脇に片開きの通用口が設けられていた。

1階は大きく2室に分かれ、東側の約10畳大の閲覧室は子供用図書室として計画され、玄関沓脱ぎとの境の壁には受付用の上げ下げ窓があり、この辺りに司書の席があったと思われる。西側は7.5畳大の書庫で、西面にスチール製の両開き窓が3ヶ所あり、窓のない三方の壁と中央部島型に書棚を造りつけていた。書棚は米松製で側板内側に均等に丸穴を穿ち、そこへ丸鋼を切ったものをダボにし棚板を載せた可動式で、質実剛健なヴォーリスらしさ¹³が見て取れ、当初のものではないかと思われる。玄関ホール正面右側は3級下がるモルタル塗りの階段で、踊り場下のスペースが片開き框戸で仕切られ、元は小遣い溜まりとして計画されたが倉庫になっていた。左側の木製階段をコの字に折れて2階に上がると、2.5畳大のホール（以後2階ホールとする）になっている。

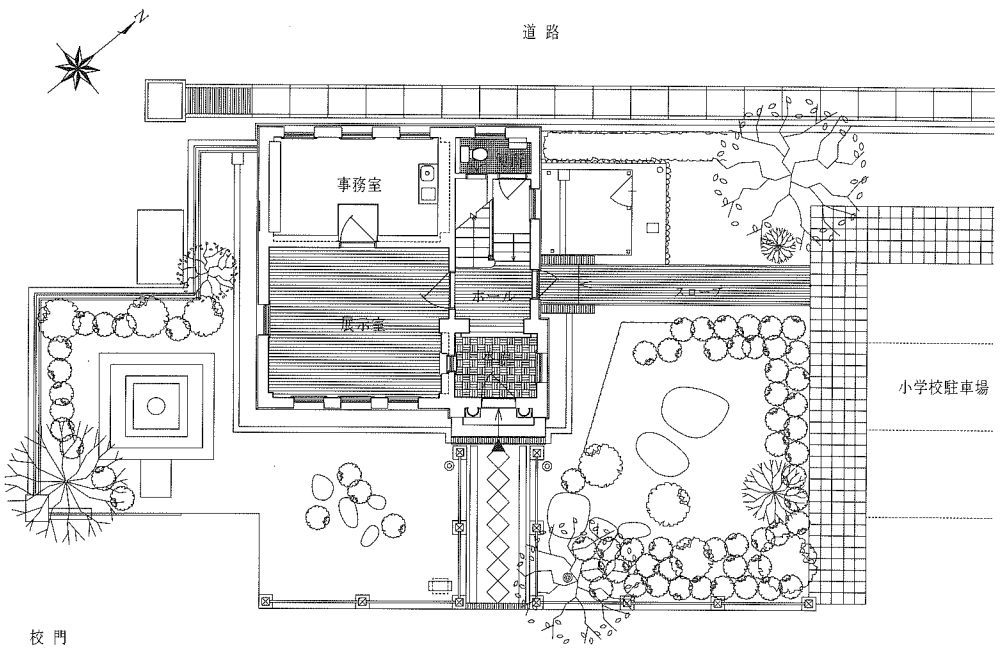
2階は17.5畳大1室で、社会人向けの閲覧室兼会議室として計画された。南面は一面に造りつけの木製ベンチがあり、北面の入り口両側には柱に挟まれた壁の窪みを利用して書棚が設えられていた。2階ホール東面の片開き戸の奥は塔屋で、南面の壁に沿って矩折れに狭



2階平面図



付近見取図



道路 校門



配置図・1階平面図

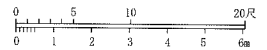


図-1 竣工 配置図兼各階平面図

い木製階段があり3階に至り、西面の片開き戸から屋上に入入りできるようになっていた。

注3 ヴォーリスは、自身の作品集序言でこう述べている。「・・・至極簡単なる普通の住宅をはじめ、条件の多い建物に至るまで、最小限度の経費を以って、最高の満足を与える建築物を人々に提供せんと一途に努力し・・・現在焦眉の急を要する日常生活の使用に對して、住み心地のよい、健康を護るによい、能率的建築物を要求する熱心なる建築依頼者の需に應じて吾々はその意をよく汲む奉仕者となるべきである。」

外 観

屋根は陸屋根とし、2階建て一部塔屋付きで、パラペット頂部と屋上スラブ、1階腰の高さに蛇腹を廻し、足元に土台を形造っている。正面北寄りの玄関両側にはトスカナ式円柱を配し、上部の壁を窪めた楕型ペディメントには燭台と書物、ブックエンド、月桂樹を配したレリーフを造り出していた。窓は原則1、2階の上下同じ位置に配し、平面機能上窓を開けることが出来なかった南壁1階の西寄りには、あるべき位置の壁に同寸の窪みを拵え表現している。2階の窓は、窓台と上部を窪めた楕型ペディメントを設け、塔屋の窓には底部に持ち送りのある浅いバルコニー状の窓台をつけている。このように小規模ながらも細やかな気遣いが感じられ、好感が持てる建物である。

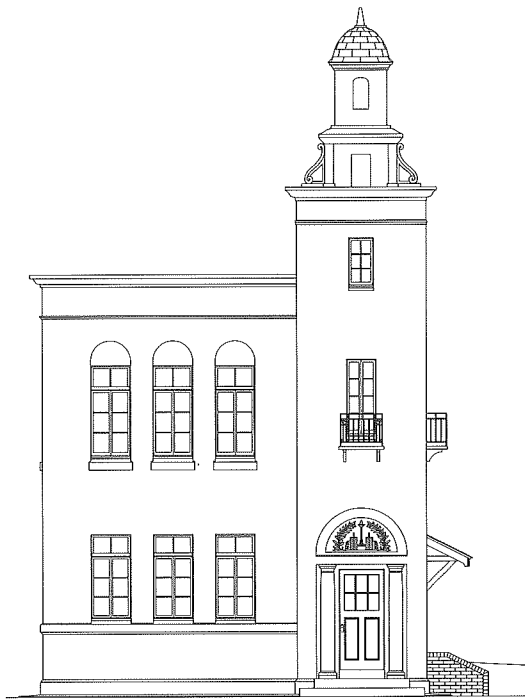


図-2 竣工東立面図

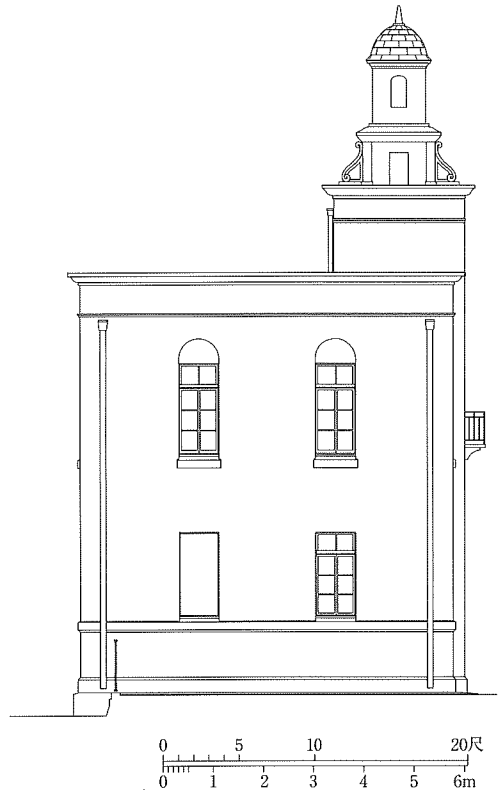


図-3 竣工南立面図

修理の方針

研究会の提言を基に水口町と打合せ、活用に向けた整備について方針を決定した。

基本方針

旧図書館の用途は、従来の教科書センターとしての機能のほかに、文化財としての公開など「旧水口図書館の活用の基本方針」に添った運営をすることになった。そのため傷んだ部分の補修だけでなく、一般の人々の利用を考えた改修が求められた。

- ① 老朽化し傷んだところや耐久性に問題がある部分を修理する。また文化財的価値を考え、間仕切りや仕上げ材は当初どおりとし、外装材やランタンなど失われた部分は復原する。
- ② 耐震性を確保するための構造補強を行なう。
- ③ 活用に必要な改修は、なるべく当初の意匠を壊さないように配慮し最小限に留める。

但し身障者用出入口として、北側通用口にスロープを設置した。既設の出入口の幅や階段などは、「高齢者、身体障害者等が円滑に利用できる特定建築物の建築の促進に関する法律」に定められた規格では、改造が大きくなり適わなかったが、登録文化財であることを考慮しながら、人的な補助というソフト面でのバックアップによって運営することになった。

各室の利活用

1階閲覧室は常設の展示室とし、巖谷小波と井上好三郎とヴォーリスの3氏を概説する場所として計画とした。書庫は、この建物を管理運営するための事務室として使用することになった。そのため書棚は南面を残し撤去し、腐朽していた材料以外は、玄関の下足箱に再利用したり補修のはぎ木などに活用している。

2階の閲覧室は、企画展示や小規模な集会など多目的用途に用いることになった。北壁面はピンワークができるようにし、上部にピクチャーレールと配線ダクトを埋込んでス

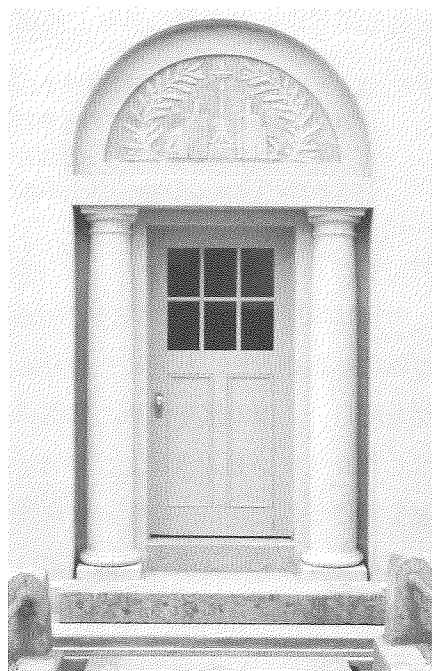


写真-2 正面玄関廻り

ポットライトを用意した。

塔屋は1、2階を活用するための機材置場として、例えば床に座ってのお話会が催される時は椅子や机を収納する倉庫となる。

修理の内容

外装及び外構

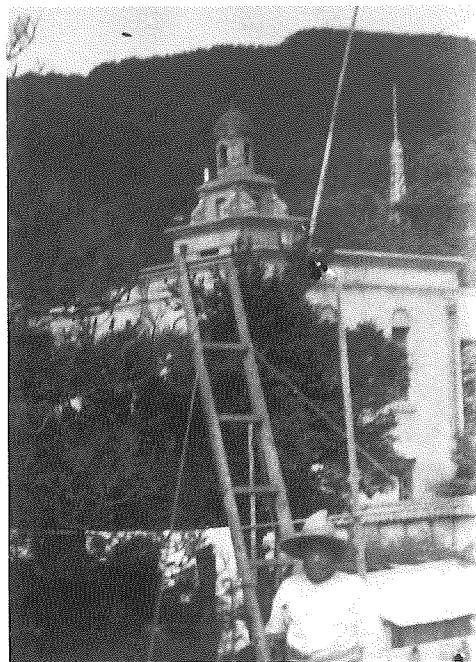
外壁は、補修で用いられた弾性吹き付け材を剥離し、打音調査で左官仕上げの浮いている部分を確認し、浮きの状態によって下地まで剥離か樹脂補修か現状維持か、場所毎の修理内容を決めていった。併せてクラック等も補修し、当初と同等の左官仕上げに復原することとし、入念に色合わせした。

ランタンは塔屋屋上に当初の固定用ボルト痕が残っていたのと、設計当初は1枚の写真（参考資料1）だけが頼りだった。屋根頂部に旗竿がついたもので、それに合わせた復原を予定していたが、工事中に竣工間もない頃の写真（参考資料2）が新たに見つかり、旗竿は国旗掲揚が必要な行事用で、当初はなかったことが判明し変更した。

屋上は防水を下地からやり替えた。解体後水勾配に配慮しながらレベル調整し、当初の



参考資料-1
戦後の文化祭と思われる写真



参考資料-2
昭和初期 図書館竣工間もない時期の写真

アスファルト防水の仕様では心許ないことと、活用の際しての断熱効果を考慮し、国土交通省アスファルト防水露出絶縁工法D-2仕様+DD断熱アルミコート仕上げとした。防水の立ち上がり部分はパラペットとの水仕舞いが悪く、鉄筋コンクリートで顎を新設している。塔屋屋上は、ランタンの足元廻りがあり形状が複雑でピースが小さいため、国土交通省ウレタン塗膜防水工法X-2工法仕様とした。

外構では正面の飛び石や縁石はレベルを据え直し、北面の犬走りは設備の都合上やり替えた。正面の石とパイプでできた柵は、参考資料の写真から後年のものと判ったが築山との関係もありそのまま残した。周辺の庭は、雑草や未生の木などを整備し樹木の剪定や石組みを直すなどして整えている。通用口の後設の流しは撤去し、西側を囲って設備ヤードを造り、空調室外機や換気排気筒や構内柱などを集中させた。

内 装

旧図書館は、往時の使用方法が土足であったか定かにはできなかったが、沓脱ぎスペースがあることや、今回の活用で童話の読み聞かせをする場合は床に直に座りたいなどの要望があったことから、靴を脱いで使用することにした。

主な内装の修理は上塗りを落とし、天井はコーニスを残し浮きやクラックの補修や2階は下地から修理した後復旧し、壁は塗装を剥離し浮きやクラックの補修後再塗装した。床板は解体後根太を修理し、腐朽した縁甲板を部分的に取り替えて復旧した。階段は、踏み板や手摺を解体し締め直している。

書庫は事務室に活用するため、床のモルタル塗りを長尺シートに変更した。北壁面は構造補強と設備用配管のスペースとして壁を蒸し、西寄りにミニキッチン^{ふか}を設えた。

構造補強

阪神淡路大震災以降、耐震補強という言葉が一般化し要望されることが多くなりつつある。旧図書館では、平成13年（2001）度の調査でヴォーリス事務所の設計当初の構造図（著作権所有：株式会社一粒社ヴォーリス建築事務所 所蔵：大阪芸術大学）が明らかとなっていたが、実際の建物に照らし合わせてみると、図面に

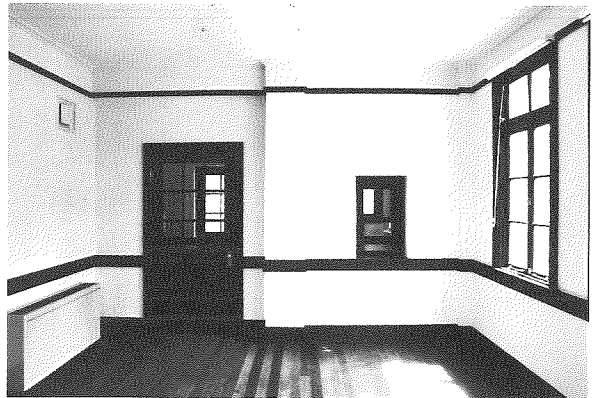


写真-3 1階展示室 北を見る
右の小窓が玄関沓脱境の受付用窓



写真-4 2階塔屋内部 南西面を見る
鉄骨の構造補強材が判る

あるフーチングがなく小梁の位置や本数が異なるなど、施工現場において変更があったと判断された。今回工事では、躯体の配筋や基礎など元の構造で判らないことが多いため、本体の文化財としてのオリジナリティを損ねず、基礎に大きな荷重がかからない程度に補強することを考えた。

具体的には、縦横鉄骨アングルを組んだフレームに3mmの鉄板を当てた補強材を、柱、梁、スラブにボルトで固定することにした。設置場所は、1階閲覧室と書庫の北壁面、書庫の東壁面、2階閲覧室の北壁面、塔屋2階西壁面である。

塔屋3階部分は、上部のランタンを鉄骨で復原するため鉛直荷重や曲げモーメントを考慮し、四隅と梁にプレートを当てて固める計画とした。補強に用いた鉄骨は全て

防錆塗装し、塔屋内部は鉄骨が直接見えるため合成樹脂調合ペイント仕上げとした。

2階へ上がる階段中央の筋壁はレンガ造で、その足元を設備配管貫通のために掘り下げたところ地中に基礎がなく、構造的に危険と判断し壁を鉄骨で挟みジャッキアップして鉄筋コンクリートの基礎を新設した。

設 備

設備器具や配管類は躯体をなるべく貫通せずかつ隠蔽させ、文化財の価値を損ねることがないように計画した。給水は今回新たに引き込み、排水は旧図書館用既設最終桁に合流している。

階段下に設けた便所は、床をタイル貼りに変更し排水口を設けて洗い流し式とし、洋式便器1台と手洗い器1台を新設した。

空調はヒートポンプ式マルチエアコンで、室外機を北側設備ヤードに据えた。換気は1階分をダクトで事務室に纏め、階段下物入れに機械を設置し床下を通して設備ヤードの排気筒に接続している。2階は塔屋を通じペントハウスより壁付きプロペラファンで排気した。

機械設備と同じく電路は躯体をなるべく貫通せず、隠蔽した。着工に先立ち、既設電路のうち再利用可能な配管を調査したが、全ての配管が途中で錆びたり潰れたりしており旧電線が引き出せず、新たに配管を設けることになった。

照明器具のうち当初のものと思われるのは1、2階ホールのシーリング灯計3台と書庫のペンダント灯2台だった。外灯は既存と同じ意匠を特注し、ほかは既製品から建物の雰囲気にあうものを選んでいく。特に1、2階の展示室は、ヴォーリスの設計図面の断面図に描かれた意匠の器具を探して設置した。事務室入口脇には、照明や空調のスイッチ類を集中管理できるよう整えた。

自動火災報知設備は、主だった室内は空気管を廻らせ、塔屋などには差動式スポット型感知器を取り付けた。受信機は事務室に置き、非常通報装置と連動させて役場と学校に通知するシステムにしている。

工事中判明したこと

基礎・軸部

構造補強と設備配管に伴う掘削で、部分的に基礎梁の存在を確認できた。場所は事務室北東面及び1階展示室の構造補強部分と北面外壁の西寄り部分で、地中梁成は500mm前後、厚みはレンガ壁より約120mm出しており総厚さ360mm前後と推定できた。事務室の土間天より地中梁天まで約380mmであった。

確認できた部分の基礎及び柱や梁は鉄筋コンクリートでラーメン構造とし、壁は下地が確認できた間仕切り壁も含めてレンガ積みであった。判明した部分の使用レンガサイズは、115～120mm×230～240mm×60mmで、パラペットの立ち上がり部分も梁上に直接レンガを積み、天端は無筋コンクリートで水勾配をとっていた。

1階事務室のスラブは厚み約100mmで、骨材の多い無筋のコンクリートだった。2階展示室北面の梁は、東側1スパン分だけが他より梁成を50mm低くしており、見掛けの統一のため木軸^{ふか}で蒸していた。2階及び屋上スラブの厚みも約100mmであった。

屋上

前述したように昭和50年代半ばの補修で、本体、塔屋ともシート防水とし、パラペット天端にアルミ笠木を設け防水層を納めていた。シート防水を解体したところ、2層のアスファルト防水層の下に厚み約25mmのモルタルの層があり、透明フィルムシートが1層、さらに下に厚み約3mm程度のモルタルの層が残っていた。

外 装

修理前の外装材は弾性吹き付け材であったが、剥離したところ砂壁が現れた。仕上げ層を確認したが、ヴォーリスの設計図面に明記されていたスタッコという仕上げと考えられる。骨材の砂は付近の野洲川で採取される、黒色の石粒を含んだものを用いていた。

犬走りは厚み約60mmの無筋コンクリートだった。正面の玄関に至る菱型の飛び石は、昭和4年（1929）の小学校卒業写真から当初からのものと判り、埋もれていた両脇の縁石も見つかった。

内 装

展示室やホールの床は、コンクリートスラブの上に約460mmピッチに幅40mm成30mmの転ばし根太をモルタルにて固定していた。仕上げは米マツ縁甲板を洋釘留めし、釘ピッチは約90mmだった。納まりにおいて変わっているのは、2階展示室出入口の沓摺りがないことで、通常であれば1階と同じように木製の沓摺りを設けるところが、扉を開けてホールと一体に使うことを強く望んでいたと思われ、当時においては斬新な手法と感じた。

1、2階の展示室とホールは、壁や天井、コーニス（廻り縁）とも漆喰塗りで、木製の幅木と腰長押が取り付け、さらに展示室窓枠上部は木製のモールディングが巡っていた。内部の主な壁は漆喰の上から水性塗料でクリーム色に着色していたが、裏方空間である事務室と塔屋は天井を漆喰塗りとし、壁はモルタル金鋸押えにしていた。漆喰壁の仕上げは、厚み15～20mmで下塗り1回に中塗り2回のうえ上塗りを厚み1.5mm程度とし、下地の材料は腰長押からはモルタル塗り、上は土塗りを使い分けしていた。書庫と塔屋のモルタル塗りの壁は厚み15mm程度で、下中塗りが各1回で上塗りの厚みが2mmである。

階段踏み板の裏は吸い付き棧を打って根太とし、コンクリート躯体に固定していた。この吸い付き棧の隙間には^{もみ}殻が詰め^{がら}てあり、吸音効果を考えたものと思われる。

建 具

各出入口の建具は木製腰付き框硝子戸で、1階展示室と事務室境の1箇所は鉄扉、屋上出入口はアルミサッシだが、脇に当初の木製腰付き框硝子戸が外して保管してあり、復原に

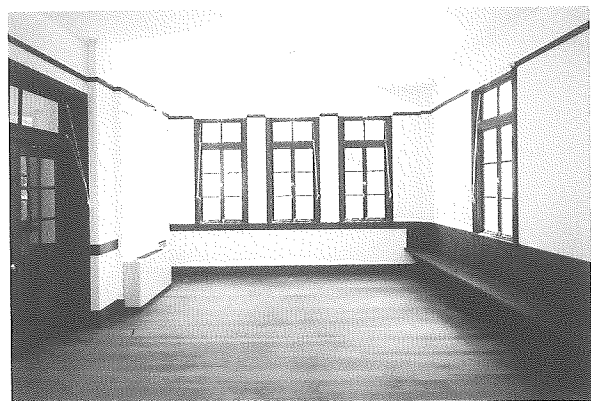


写真-5 2階展示室 東方向を見る

役立った。窓は事務室のスチール製以外は木製の両開き及び片開きの框ガラス窓で、欄間は横軸回転框ガラス窓であった。木製建具のいくつかは框の仕口が緩み、L型やT型の金物で補強していた。仕上げは内部がオイルステイン、外部が合成樹脂調合ペイント仕上げで、修理前は赤茶色に塗装されていたが剥離作業中に下から青磁色の塗膜が現れ、復原の根拠となった。両開き窓についていた滑り出しの開閉金物は、珍しい機構のもので、スチールに亜鉛鍍金され刻印からアメリカ製と判ったが、残念ながら傷みが著しく再用することが出来ず、同じ機構の既製品がないため取り外して保存している。

おわりに

冬期をはさんだ厳しい工期と限られた予算のなかで、資料も少なく解体してみなければ判らないことの多い大変な現場でしたが、水口町（当時）関係各位のご協力と工事関係者の努力によって、無事完成できましたことを心から感謝いたします。

なお、参考資料1・2は甲賀市教育委員会文化財保護課のご協力を得ました。口絵3・4の写真と写真2・4・5は、うかい写真スタジオが撮影したものを使用しました。併せて御礼申し上げます。

参考文献 滋賀県の近代化遺産 平成12年 滋賀県教育委員会発刊
水口町誌 上巻
水口小学校百年誌
滋賀の図書館 歴史と現状 著者兼発行者 平田守衛
建築にみるヴォーリスと近江八幡 編集発行ヴォーリス顕彰事業実行委員会